
Shadow !

河原木 たつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Shadow !

【Nコード】

N6368Z

【作者名】

河原木 たつき

【あらすじ】

そこら辺に居そうな女子高生、椿はある日の夜をさかいにシャドウと呼ばれる化物のような得たいの知れない生き物と戦うことになってしまう…

good morning

「おはよう〜！椿！」

朝からテンションが高い友達の郁美の声が道路に響いた。

「おはよう〜相変わらず朝からテンション高いね…」

頭をかきながら椿が言い返すと、郁美は嫌みを言うように言った

「これだから椿は16歳にもうすぐなるのに彼氏ができないんだよ！」

「ヤカマシイ」

冷たい視線を郁美に向けた。

「有沢、おはよう」

後ろからなんと男らしい声がした

ふりかえるとそこには背が高くいかにも運動部の体つきをした同じクラスの涼太が立っていた。

「お、おはよう」

椿は不意打ちをくらったかのようにあいさつを返した

「なにしてんだよ、朝っぱらから道の真ん中でケンカして」

椿と郁美は周囲を見渡すと通勤途中のサラリーマンやOLさん、小
学生が自分たちをチラチラ見ながら脇を通ることに気がついた。

二人は赤面した

何事もなかったかのような顔で三人で学校に歩き出した

「椿、学校着いたら宿題見せてくれない？俺昨日忙しくて出来な
かったんだ。」

「うそつけー！あんたはいーっつも！忙しいって言って寝たり、
ゲームしたり、漫画読んだりしてんじゃん！この暇人が！」

椿は涼太を睨み付けた。

そのやりとりを見ていた郁美は椿の脇腹を肘でつつきながら言った

「おうおう 朝からお熱いね」

「違うよ！」

二人の声が重なった

そんなやりとりをしながら学校へと続く坂を登り始めた。

F r i e n d

暑い

8月の終わりごろのクセに暑い

椿は歩みを進めながら汗をぬぐった

後ろから聞き慣れた女子の甲高い声が聞こえた

その声の持ち主は勢いよく椿と郁美に抱きついた。

「うわぁ！」

二人は前に倒れそうになった

「まったく、リンは〜」

郁美は呆れ顔で後ろから抱きついたリンに言った

しかし、リンは二人を放さなかった

それを見ていた涼太は苦笑して

「リン、また彼氏にフラれたんだろう！」

と言いはなった。

郁美と椿は涼太の言葉を聞いた瞬間一斉に涼太に飛びげりをくらわ

せた

「女心が分かんないバカ涼太！彼女いないクセに！」

「リンに謝れ！切腹しろ！」

二人は口々に言いながら涼太を蹴った

するといつから居たのか

「おいおい、二人ともそこまでにしとけて涼太が謝るに謝れないよ」

とても落ち着いた声がした

いつから居たんだよ！

みんなはツツコミたくなったが誰もツツコミする人は居なかった

涼太は制服に付いたホコリをはらいながら

「ったく、やっとそろったな」

「雄輔はいつもイツメン（いつものメンツ）の最後にそろっよね」

リンは泣き止み嬉しそうに言った

校舎の中は心地いいくらい涼しかった

登校してきた生徒が何人かいたみんな汗だくだった

「あ、アタシ職員室によっていけないと行けないから先に教室行つてて」

椿が言うと

イツメンの4人はわかったと教室に向かって歩き始めた。

高校に入学してもう4カ月くらいだった

郁美と涼太は小学校から一緒だ
雄輔とリンは高校で出会った

4カ月しかたっていないのにみんな大きく成長した気がした気がする
なんだか急に寂しくなった

ヒンヤリとしたものが椿の心の中に広がった

帰り道

ホームルームが終わった

椿は一人で校門を出た

彼氏居ないから一人なの？って？ヤカマシイアタシにはまだ早いんだよ

郁美はバイトするから先に帰って

涼太はバスケ部だから…

リンは美術部で…

雄輔は背がでかいクセに茶道部で…

アタシは中学までバスケやっていただけど入部は面倒くさかったからやめた

椿は一人帰り道を歩いた

帰り道は行きとちがって人通りが少ない

夕日が美しく帰り道を照らした

ガチャリ

ドアを開ける鈍い音が家に響いた

椿の親はアメリカに転勤した

アメリカに来るように誘われたが英語に自信がなかった椿は日本に残った

父親と母親はやたらとテンション高いそこが長所であり短所でもあった

いなくなつてやっと父親と母親のありがたさがわかった

なんだか今日は晩ごはんを作るのも食べるのも面倒くさかった

ドッサリと力なくソファーに座りこんだ

テレビつけて数分は観ていたがそのまま寝てしまった。

Shadow & Hunter

目が覚めた

家に帰ってきてソファーに座って…

寝たんだった

むっくりとソファーから立ち上がった時計を見るともう8時になる
うとしていた

辺りはもう暗闇に包まれ、外は街灯が輝いて見えた

なんだかお腹が空いたので何か食べようとしたが、作る気にはなら
ない

学校のカバンから財布を引っ張りだし玄関へ行き外へ出た

外は昼間とは違い涼しかった

誰も居ない寂しい道をコンビニに向かって歩き始めた

街灯がついているとはいえ夜は暗い

人と時々すれ違うが近づかないと顔がわからなかった

コンビニの帰り

前から一人の人影が見えた

けっこう背の高い人だろう

外人の人かなと思った

だが顔が見えて椿は息をのんだ

全身真っ黒で顔には目と鼻がない

口は大きく鋭い歯がいくつも並んでいた

しかもデカイ

突っ立っている椿にその謎の生き物は長い手が凄い勢いで飛んできた

ギリギリ避けた椿だがしりもちをついてしまった

立とうと手をつくが恐怖で力が入らなかった。

謎の生き物はもう一度椿に攻撃してきた。

ヤバイよヤバイよ！人生最大のピンチ！これはなんかの間違いだよ！
！そうだよ夢だ夢！

次の瞬間凄いスピードで何かが謎の生き物にぶつかった

謎の生き物は耳を塞ぎたいくらい嫌な叫びをはなつて消えた

そしてぶつかったのは女の人だと分かった

「なにそこで座っている速く立たないか！」

怒ったような口調で言われた

街灯に照らされ浮かび上がったのはスニーカーに短い短パン、白いポロシャツをきたなんともナイスバディーな人だった

ルパン三世に出てくるフジコじゃん、歳はアタシより2つ上くらいかな？

椿は立ち上がった

「ありがとうございます」

と椿が言い終える前に女の人が始めた

「礼ならいいよ、アタシは国枝リコ、19歳あんたは？」

「有沢椿」

「ふーん、まあ立ち話もなんだからあんたの家行ってさっきの生き物の説明するよ」

リコがクールに言った

椿は危うくはいと言ってしまふところだった。

「っておい！さっき会ったばかりの知らない人を家に入れるかい！」

椿は思わずツツコミを入れてしまった。

「また、シャドーに襲われたいの？」

シャドー？なんじゃそれ？さっきの生き物？

「そうだよ、さっきの生き物だよ」

「そうなんだ、知らなかった…っておい！人の心読むなあ！というより読めんのかい！」

「なんだ、ツッコミのセンスなかながあるじゃない」

自分のツッコミのセンスに驚きながらもなんか面倒くさいのでリコを家につれて行くことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6368z/>

Shadow !

2011年12月21日22時48分発行